「土器にみる縄文人の思考」を考える

鈴木敏昭

はじめに

本稿では、縄文土器を作り使った人々を縄文人と呼ぶ。もちろん「縄文土器」も「縄文人」も我々の研究上の都合による仮称であり、概念である。しかし、実在した土器、実在した人々を前提にイメージ化された概念ではあるが、当時の人々に共有されていたイメージである保証は全くない。むしろ、こうした概念を使う以上、いかに彼らの思考に近づくことができているかが我々に問われていると考えるべきであろう。忸怩たる思いもあるが、自分なりの課題解決に向けた歩みの一端を披瀝し、識者の教示を得たいものと念願する。

また筆者は、「考古学は歴史学の一分野である」とする定義を、ひとまず棚上げすることにしている点も、ここでお断りしておきたい。もっぱらの関心事は生命体、わけても人間が生み出すものの構造に捕らわれているせいかも知れない。時間・空間を超越して語れるものを希求する研究は、ある意味「人間学」とでも称すべきなのだろうか、とも思う。しかし、考古学で扱える分野は実に狭い。かつて生きた人々の残滓を精力的にかき集めたとしても、それは当時の生活の何パーセントにも当たるまい。おそらくパーセントと表示すること自体不可能な程小さな数値になることは間違いないだろう。我々はそこから何を導き出すことが可能だと言うのだろうか。

I

我々の考古学は、とりあえず混沌とした残滓に秩序を与えることを選択した。そしてその秩序とは列島全域にわたる土器による編年網の作成であり、その網目の中にあらゆる文化細目をはめ込むことであった。より精緻な網の目が作れれば、より細かな生活と文化の変遷が語れると信じたのである。こうして当時の暮らしの一挙手一投足までが明らかにされるはずであった。

しかし、「とりあえず」出発した土器による編年研究は、「より精緻に」とのかけ声を背景に、終わりの見えない細分合戦に足を取られ始めた。細分に組みしない人間は「負け犬」とさえ陰口を叩かれながら……。

だが、細分合戦に使われている「土器型式」とはいったい何者なのだろうか。

もちろん、その出発の経緯、目的を考えれば、第一義的には年代学上の単位を意味するはずである。しかし、土器を製作・使用したのは当時の人間であるという、ある意味での「正しい」観点から、いつしか「土器型式の背後には人間（＝当時の人間）が存在する」という論理の飛躍が流布するとともに、集落論や人口論、移動論などのキー概念として大手を振るうに至っている。こうした現況には首を傾げざるを得ない。研究目的に沿った相応の概念、方法論の整備を願いたいものである。

そもそも現行の土器型式とは、現代の研究者が、実在する混沌とした土器群を、出土状況や製作上の癖、文様等、様々な特徴等で分析・分類し、〈編年〉をキーワードに秩序正しく概念化したものであり、すでに実在の土器群とは認識階層が異なったものである。土器型式の背後に存在している

のは現代の研究者にすぎない、という点を承知する必要があるのではないだろうか。

課題解決のための手段として概念が措定されるのだとすれば、編年網を作ろうという研究者の目的意識に基づく「土器型式」は、すぐれて現代的な産物と言える。そこには縄文人の思考に忖度する必然性は認められない。編年網を作るだけなら、必ずしも完形土器が必要なわけではなく、破片でも十分に役割を果たすことができるのである。もちろん現実に実績をあげてもきている。

完形土器が要請されるのは、編年という目的のためではない。「完形」でなければならない研究目的があってはじめて要請されるのである。本稿で語ろうとする、土器から縄文人の思考を読みとろうとする研究も、その一つに当たるだろう。

我々が、ここでなすべきことは、その時々の縄文人たちが、どのような思いで土器を作ったのか、彼らの思惟、宇宙観は果たして、彼らの製作物にどのように刻み込まれているのかを具体的に明らかにすることにあるのではないだろうか。時空を超えて不易なるもの、そして次々と変化を重ねる流行の本質とは……。我々の分析は何を明らかにするのだろうか。縄文人と現代人との接点を見いだすことができれば幸いである。

II－1

我々は縄文土器を前に、なぜこんな使いづらい形にしたのだろう、なぜこんなに文様を所狭しと執拗に施したのだろう、と戸惑うことがしばしばある。この戸惑いは、現実を合理的に解釈しようとする現代人の癖に起因する。素直に縄文人の思考を受け入れることが先ず必要となろう。縄文土器とは、縄文人により機能と象徴性が織り込まれた手作りの器である。我々はそこから彼らの思考の何たるかを知る努力をしなければなるまい。その努力は、彼らの社会、世界観の一部なりをきっと垣間見せてくれることになるはずなのだから。

そのためにも、先ず個々の縄文土器を偏見なしにそのまま受け入れることが大事な要件となる。そしてそこから、どのようにして立体物として仕立てあげられてきたのか、器面上へはどのような文様をどのように配置をしたのか、文様と文様の関係性はどうなっているのか等の詳細なパターン分析を経ることによって、個々の土器を貫く〈基本原理―分類・論理体系―世界観〉が必ずや見えてくるものと信じている。

その際、筆者は、器面上における文様配置の関係性を探るため、〈分帯〉〈分割〉を分析の基軸に据えてきた。

〈分帯〉とは、言うまでもなく、器面上の施文域を帯状に、口縁部から底部等へといく段かに輪切り状に分けることを意味する。いわゆる文様帯概念に近似するが、そこに系統論乃至文様発達史といった進化論的観点を含むことはせず、あくまでも分析概念として即物的に扱われるべきと考える。

〈分割〉についても〈分帯〉同様、器面の施文域を縦位にいくつかに分けることを意味し、分析概念以上の役割は持たせていない。ただし、この分割ラインが器面全体を統御しているか、一施文帯レベルにとどまっているのかは、施文原理上大きな意味を持つはずである。

ところで、分帯された施文帯にはいくつかの単位文様が１～数個繰り返し施文される（変形・変容もある）ことを原則としているが、こうした文様相互の〈関係性〉を理解するための道具の一つとして〈対称〉概念はとりわけ重要である。しかし、対称とは必ずしも左右対称のことだけを意味

するわけではない点にはここで注意を喚起しておきたい。対称性があるとは、ある形などが、ある操作をしても、その前と形などが変わらないことを言い、その操作には「鏡映（鏡面に映す）」「回転」「反転」「並進」などがある。さらにこれらが組み合わさった、より複雑な操作もあるが、本稿で触れることはない。しかし、対称性をキーワードとした分析の先には、遥かではあるが「縄文人の思考」とも言うべき高峰への足掛かりが得られるのではないかとの期待がある。

II－2

上記の問題意識のもとに筆者は、関東地方出土の勝坂式から加曽利ＥⅣ式比定のいくつかの土器分析を試みたことがある（鈴木1983）。その結果、製作者の〈施文意識〉は、個々人というレベルにおさまるものではなく、明らかに彼らは、彼らの共有する施文原理に基づいて採択された文様を器面に配置（配列）していたのである。しかもそうした原理は、我々が認識する土器型式圏を遥かに超えて実践されていた可能性も窺うことができたのであった。

施文意識に係る具体的な内容は、次の三点に要約することができよう。

① 土器には、一定方向からの視線を意識して、全体的な文様の配置関係が決定されていた可能性があるが、このことは土器の正面観とも関係してこよう。

② 同一の単位文様は並進対称性を有するかのごとく土器面を一周するが、際限なく円環を巡ることは拒否されている。

③ 土器面の文様は複数単位に分割されているが、偶数単位の場合にあっては、相対する面の文様は意識的に違える傾向にある。

以上をさらにまとめれば、縄文中期人は、鏡映、回転、反転、並進というどの対称操作に対しても必ずどこかで一部違える、つまり彼らは「対称性を破る」という施文上の基本原理に忠実に従っていたと言い得るのである。今や、対称性の破り方のパターンのいくつかは我々も習得することができている。しかし、個々の土器には、まだまだ二重、三重の重畳等によって隠されている施文パターンが多々存する。〈対称性の破れ〉という施文上の基本原理の発見は、縄文土器研究のほんの入り口に過ぎないかのようである。

先ず旧稿にしたがい中期土器から分析を進めたい。なお、出土遺跡名は図版に直接明記したので参照いただければ幸いである（以下同）。

事例１（第１図３）：４単位構成の土器。

胴上半部に区画された施文帯には、その中央部分に一条の隆帯が一周し、器面をほぼ等間隔に分割するかの如く、４つの半渦状文が配されている。１つは上向き、他の３つは下向きという具合にである。仮に、例外なく４つとも全て下向きであれば、土器の中心軸に沿って４回回転軸という対称操作の土器ということになるはずであった。分かりやすく言えば、90度回転しても何ら変わらず、90度の整数倍回転させても区別できない〈対称性を有する〉土器になるはずであった、ということである。しかし、１ケ所の変形は、明らかに回転対称の破れを外示する。記号で表せば〈ａ＋ａ＋ａ＋ａ１〉ということになろう。だがこの土器はさらに、相対する部分同士の対称性（180度の回転操作）をも破ることが目論まれていたのである。むしろ、こちらの方が本質かも知れない。つまり、この土器は２単位分割を原則とする土器なのであった。２個一対を１単位と見なせば、必然的に２単位分割の土器となる訳であるが、実際にはどこに分割軸があるのかについては即断し得ない。正

面観と不可分の関係にあるはずであると想定しておく以外にない。しかしながら本例に限れば、2単位分割の軸がどこにあろうとも、相対する面は必ず非対称になるように計画的に施文配置されていたと指摘することができるのである。記号化すれば〈(ａ＋ａ)＋（ａ＋ａ１)〉となる。こうした例が、おそらく最も単純な施文パターンであろう。そのためか、施文原理がより純粋なかたちで表れていたようである。

事例2（第1図2）：3単位構成の土器。

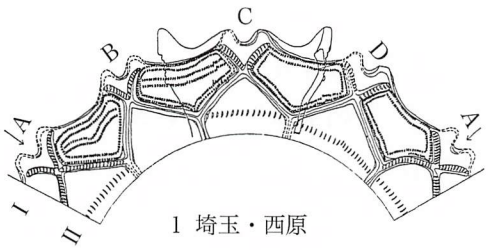
胴上半部に画された施文帯には、大柄な隆帯文がほぼ等間隔に3単位配される（A・B・Cと仮称)。この3つの単位文様は良く似ており、一見120度の整数倍回転できっちりと重なる土器かと見誤る程である。だが子細に観察するといくつかの〈破れ〉を見いだすことができる。先ず隆帯そのものに目をやれば、AとBはそれぞれが口唇部に連接し、文様の中央部分で終端を迎える。しかし、Cは口唇部に連接することもなく、終端も右方向に大きく延びている。記号化すると〈ａ＋ａ＋ａ１〉となる。さらに隆帯上への刺突に注目すると、Aのみが他のB・Cと異なっていることに気付く。記号化すると〈ｂ１＋ｂ＋ｂ〉。つまり対称性を破る部分を1ケ所ずつ二重にずらした結果、A、B、Cそれぞれがすべて異なる文様と化したのである。記号化すると〈ａｂ１＋ａｂ＋ａ１ｂ〉となる。こうした3分割された土器には、そもそも相対する面に対比すべき文様が来ることはない。しかしそうした中で、Bの存在は、A・Cそれぞれの文様要素を取り込んだ文様としての位置付けが可能であり、A対Cという非対称なものの対立を調停する役割を担っていたかのようである。おそらくBが正面として、この土器の施文原理を主導していたのであろう。

事例3（第1図1）：4単位の波状口縁を持つ土器。

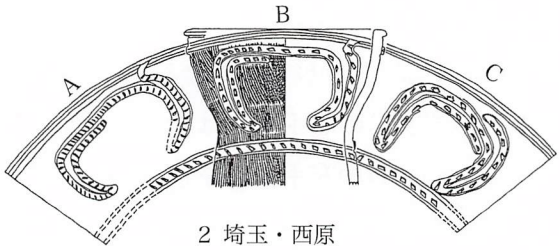
波頂部をA～Dと仮称するとともに、波頂間の、隆帯で逆五角形に区画された部分をⅠ施文帯、波頂下の正五角形の部分をⅡ施文帯と仮称して説明の便を図りたい。先ず目につく部分としては、Ⅰ施文帯ではA－C間の枠内には施文があり、C－A間には無いという非対称的なあり方であろう。〈(ａ＋ａ)＋(ａ１＋ａ１)〉。しかも、Ⅱ施文帯にも目を移せば、Bの縦ライン下に当たる枠内は無文、Dラインに当たる部分は施文あり、という逆転したあり方となっており注目されよう。大きくA－Cラインでの2分割が意図されていたことは確実であろう。しかし一方で、Ⅱ施文帯のあり方にこだわれば、Bのライン下の枠内無文は回転対称を破る箇所としての位置づけがなされる(〈ｂ＋ｂ１＋ｂ＋ｂ〉)が、4単位の場合は二重に破る箇所を用意しない限り、相対する部分との違いを明示できなくなる。そのために用意された破れが、Aのライン下の隆帯への刻列だと考えられる（〈ｃ１＋ｃ＋ｃ＋ｃ〉)。Ⅱ施文帯をまとめれば〈ｂｃ１＋ｂ１ｃ＋ｂｃ＋ｂｃ〉となり、これで相対する面はすべて「平等」に異なることになった訳である。しかしこのことは、Ⅰ施文帯における2分割ラインは固定化されているにも関わらず、Ⅱ施文帯での分割ラインは自在であるということを意味するが、果たしてその理由は那辺にあるのだろうか。

事例4（第1図4）：2個一対の山形小突起を相対する位置に有する土器。

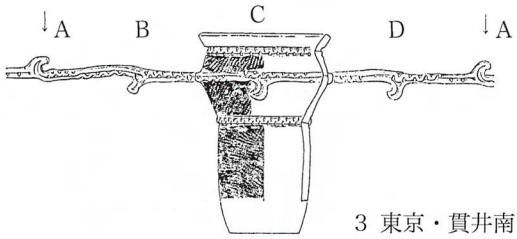
頸部により口縁部（Ⅰ）と胴部（Ⅱ）に文様帯が分帯される。Ⅰ施文帯には隆帯による尾の伸びた渦文が相連接しながら器面を一周する。その際の渦文は山形小突起同様2個一対を原則に4単位



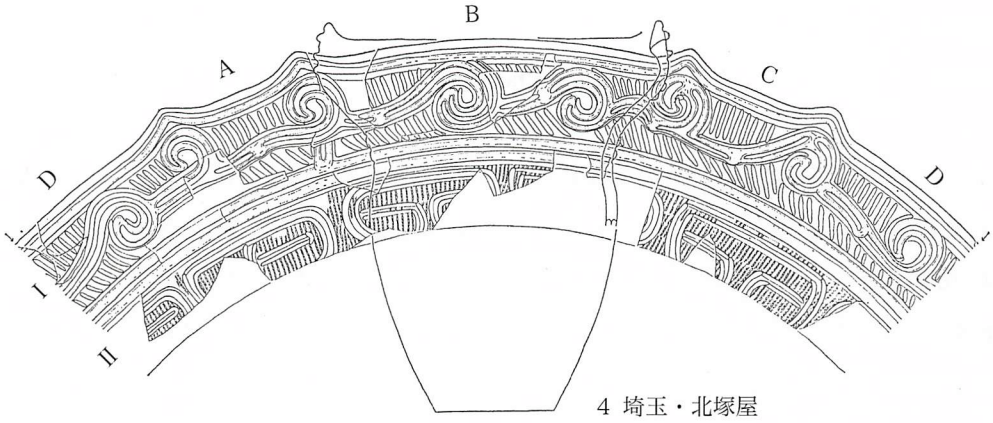
1 埼玉・西原



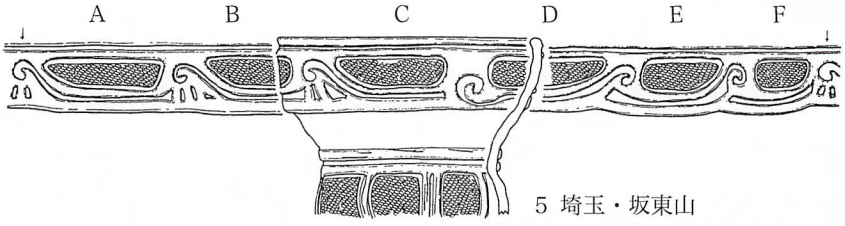
2 埼玉・西原



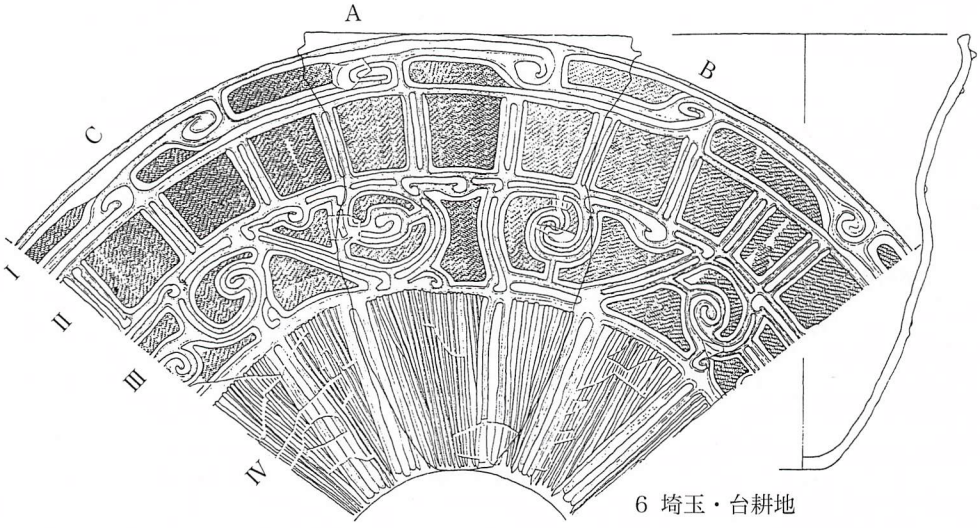
3 東京・貫井南



4 埼玉・北塚屋



5 埼玉・坂東山



6 埼玉・台耕地

第1図　土器展開図（中期）

配されており、それぞれをA～Dと仮称する。口唇部の山形小突起は渦文のうちの渦巻き部上に配されるが、それは相対するAとCに限定し、B・Cに設けられることはない。しかし、AからCへと180度回転したとしても重なることはない。何故なら、小突起下の渦は左巻きを原則としているにも関わらず、Cの右手の渦は右巻きに変じているからである。同様に突起下以外は右巻きを原則としているが、Dの左手のみ左巻きになっている。さらに渦文上に付加される「隆起瘤」に注目すれば、渦巻き部ではCの左右両者にのみ存在し、一方、渦巻きから伸びる尾部上ではDの2ケ所のみが省略となっていることに気付く。まさに対称性の破れが明示されているのであった。A・BとC・Dとの非対称性は明らかであろう。なお、Aの右手の渦巻き下に、頸部の隆帯へと連接する箇所が例外のように設けられているが、これも円環を断ち切る意味合いが隠されているのかも知れない。しかし、I施文帯で明らかとなった分割ラインが、II施文帯に影響を及ぼすことはないようだ。欠損部が多く確実なことは言えないが、器面に巡らされる単位文様が5単位という点は、I施文帯との整合性を欠いている一つの証拠であろう。ただしAの左手突起の縦ライン上に位置する部分のみ、文様を他の部分と違えているように見えるが、もしそうであれば、やはり回転対称を断ち切る部分がここにも存在していると言えるのかも知れない。

事例5（第1図5）：加曾利E式土器の最もポピュラーな器形と文様構成を有する土器。

口辺部の施文帯には縄文充塡の楕円枠状文とそれを抱え込むように配された渦文とが組み合って、器面を6単位で経巡っている（A～Fと仮称）。しかし本例もこれまで見てきた土器同様、渦の巻き方に着目すると、A・B・Cの単位が抱える渦は左巻き、D・E・Fは右巻きとなっている。やはり器面の2分割を意図していたのである。そのための施文上のゆがみ（原則左巻きを右巻きに変更したために生じる必然的なゆがみ）はDとFが引き受けざるを得なかった。つまり、Dでは二つの渦文の尾部を連接することで方向チェンジをし、Fでは本来あるべき渦文の渦を省略することで元へと戻したのである。記号化すれば〈(a＋a＋a)＋(a 1＋a 2＋a 3)〉となろうか。もちろん相対するAとD、BとE、CとFの関係は、それぞれが似て非なる文様となるよう計画的に構成されていたと言えよう。なお、口辺部の施文帯と胴部の施文帯との関わりについては不詳とせざるを得ないが、分割ラインを等しくしているように図からは読み取れない。東京・平山橋遺跡、同・西野遺跡、埼玉・金掘沢遺跡、同・ハケ遺跡C地区からも類似した施文構造の土器が出土している。

事例6（第1図6）：　本例はI～IVに施文帯が分けられるが、相互の関係性が窺われる類。

I施文帯は、渦文と縄文充塡枠状文とが交互に配置されているように見える。しかし、渦文の尾はそのまま枠状文を包み込んで一体化しているのである。しかも、上からの渦文（右巻き）、下からの渦文（左巻き）が、交互に二分の一ずつ譲り合いながら横位に配置されているのである。渦文だけを数えれば「6」、枠状文だけを数えても「6」と明示されるが、実態は、上からの渦文を基準としても、下からの渦文を基準としても、3回回転軸という対称操作の土器である、ということになる（上からの渦文を基準にA～Cと仮称）。120度回転で常に重なる文様ということである。したがってI施文帯には破れがない。だが相対する部分に対応すべき単位文様を配置することの叶わない3単位構成であるという事実は残る。記号では〈a＋a＋a〉となる。

ところが、III施文帯は明らかに２単位構成をとる。細部の相違はともかく、横位のＳ字状文と逆Ｓ字状文が、大きく「鏡映対称」の関係にあるように図からは読み取れよう。しかしこれは、あくまで紙という平面に描かれた展開図上での観察に過ぎない。土器という円環上に戻してみると、概ね180度の回転操作をする箇所に配置されている文様であるということになる。ただしこれらの文様が正しく重なることはなく、非対称の関係になる。横Ｓ字状文間の枠状部分にも、一方は充塡縄文のみ、相対する面になるもう一方には渦文が付加されるという違いがあるが、大枠では〈ｂ＋ｂ１〉で良いであろう。

また、本例の施文の起点であるが、おそらくＡの右の渦文直下ではないかと考えられる。II施文帯、III施文帯、そしてIV施文帯へと至る縦ラインが、ここのみ明確なのはそうした理由であろう。なお、II施文帯は10（３＋３＋４）単位に分割されている。IV施文帯は、隆帯垂下の起点が横Ｓ字状文とIII、IVを分帯する隆帯との接点であることから６本垂下が予測されるが、結果的には１本省略の５本垂下であった。ここでも対称性は破られていると見るべきなのだろうか。

いずれにしろ単位数は上から順に「３→10→２→５」となっているが、外示的にはＩ施文帯の３とIII施文帯の２が、本例の施文構造を端的に表していると見なせそうである。

II－３

筆者は、勝坂式及び加曾利Ｅ式土器の施文上の基本原理は〈対称性の破れ〉であると主張してきた。上記の事例分析からもそのことは首肯されるものと考えるが、果たしてそれだけなのだろうかとする疑念もまた脳裏を去らない。

「破る」とはどういうことなのだろうか。「破る」だけなのだろうか。回転対称を１ケ所で破る（単位文様の反復施文による器面一周を拒否する）という行為が、同一施文帯内では場所をずらし、あるいは施文帯を違えるなどして、例えば、事例１、５の場合は１回、事例２の場合は２回、事例３、６の場合は３回、事例４の場合は４回実施されていたことが確認された。しかし、こうした「破る」行為は、事例の解説中でも注視したように、「器面の２分割」を肯定する範囲内で行われていた可能性が高い。しかも、分割された両者の関係は、明らかに非対称である。「二項対立」の関係にあると言い換えても良い。こうした関係は「器面の２分割」という上位レベルに止まらず、相対する位置に配置される単位文様相互の関係もまた、ことごとく非対称なのである。ただし同時に、「器面の２分割」という徹底した対立に対し、宥めるかのごとく回転対称性（１ケ所で破るとはいえ）を維持するための操作が行われていることも承知しておく必要があろう。

だが問題は３単位の土器。３分割されているということは、相対する面には残りの２単位文様の中間部が来るということを意味する。相対する面との非対称性は本例では強調できない。しかし、別なかたちでの仕掛けがあった。例えば、事例２で確認したことではあるが、３単位文様のうちＡとＣには徹底した非対称文様として、相対する面としての役割を担わせる一方、Ｂには両者の文様要素を取り込むことで、Ａ、Ｃの対立を融和させていたのである。対立と融和。一個体の土器には、その両者が織り込まれていたのである。事例６の、III施文帯の２分割構成に対する、Ｉ施文帯の二重の３単位回転対称という関係も同様の事例に属する。とりわけこのＩ施文帯は、II・IV施文帯が〈対称性の破れ〉を設けているにも関わらず、完全なる３回回転軸という対称要素を持つことで特筆される。

以上から我々は、反復を基調として単位文様を器面に横位配列しながら、対称性をもって円環が閉じられることを拒否する縄文中期人の心性、対称的な安定をあえて放棄し、不均衡を採択するという、彼らの社会や集団の暗黙の意思といったものを強く感受する。しかし、その意味するところを知ることは容易ではない。ある意味、考古学の領域を超えているのではないか、とも思う。

Ⅲ－1

縄文中期の関東地方で普遍的に見られた土器の施文原理〈対称性の破れ〉は、その前後にも広がっている可能性がある。少し時空を超え、縄文土器全般を通覧してみることにしよう。

先ず、草創期から前期を……。しかし、早くも行き詰まってしまう。第一、展開図が少ない。中期を遡れば遡るほど完形土器の出土数が減ずるというのも一因ではあるが、多縄文や粘土紐等による煩雑な文様が多用される土器もまた、展開図作成には「手間暇かかる」という理由から、残念ながら、敬遠される傾向にある。土器は立体物である。全体が分かる実測図作成を是非お願いしたいものである。幸いにも展開写真を多数収めた『縄文土器大観１～４』（小林達雄編集・小川忠博撮影1988～1989）が刊行されている。実測図ほど細部に渡った検証が可能というわけではないが、傾向把握には便利である。しばらくは、同書から窺える事実を抽出していきたい。なお、同書の展開写真を用いた説明の際、「１巻図版93番」であれば「１―93」と略記するので、原典参照いただければ幸いである。本稿での引用図版中でも同様の略記で統一している。

さて、草創期から早期、前期を対象とする『１巻』の頁を繰ると、なるほど縄文土器には、爪形文、縄文、撚糸文、押型文、貝殻文、竹管文などの様々な文様が多彩に器面装飾されているものだ、と改めて感心する。しかし、こうした多様な文様は、いずれも「施文原体の転写」に基づくものであるという点にも気付かなければなるまい。それには単純な押圧もあろうし、回転の場合もあろう。

ここでもう一つ確認しておきたいこととして、こうした転写は一度で完了してしまう場合は少なく、「反復施文」が原則であるという点である。反復施文とは「＝対称（回転）」ということをも意味する。施文原体の発見・開発への執着も、縄文人の抱える性格の一端を示すが、反復施文という行為は「対称意識の醸成」にも一役買っていたように思える。視点は異なるが稲田孝司は、施文具の制約下にある文様を「施文具形態文様」と呼び、一方で、篦や棒状施文具により引かれる沈線のように施文具形態に制約されず、施文する者の意向が反映しやすい文様を「方位形態文様」と呼び区別した（稲田1972）。注目すべき着眼点であろう。

さて、〈対称性の破れ〉の確認に戻る。

草創期の土器群は、部分的に断ち切る箇所を設ける例がないわけではないが、隆線文、爪形文、円孔文、多縄文とどの例を見ても、平口縁以下を分帯する意識は明らかだが、分割意識は殆ど確認されない。こうした傾向は、その後も撚糸文、押型文土器へと継続される。ただし押型文土器には、口縁の４ケ所に縦瘤の垂下があるものが東京都で１例（１―59）、４単位波状口縁（Ａ型波状）を有するものが関西を中心に数例（１―53・67・72・73）発見されている。単位数と分割意識を同義に捉える必要はないが、注目しておきたい。なお、波状口縁には、波頂部が山形状のものと丸みを帯びたものの二者に大別され、本稿では説明の便宜上、前者をＡ型波状、後者をＢ型波状と呼び分けていくこととする。

施文意識が大きく動くのは、施文具形態を主とする文様から脱しつつある貝殻沈線文系土器群に

なってからのことであった。沈線文の盛行と波状口縁の定着がきっかけとなり、山形波頂部を意識した単位文様が生み出されたのである。波状は4単位を主体とするが6単位例も見られる。しかしここで注目したいのは、文様が2個一対を原則にしている点である。4波状の土器であれば、二つの波状を一対として結び、2単位構成としているのである。第2図1—93例を参照いただければ一目瞭然であり、胴部の文様も含めて180度回転対称となっている。6波状の例（1—92）も同様であり、結果的に120度回転対称の3単位構成となっている。これらは言い換えれば反復施文の土器ということになろう。

しかし、北海道中野A遺跡例（1—89）は大柄な文様が器面一杯に4単位構成されているが、2個一対という連接文様にはなっていない。個別文様の一回の反復はあるが、2分割では同一文様の反復施文というわけにはいかない。しかも相対する波頂下にも同一文様は来ないという施文構造が採択されているのである。記号化すれば〈a＋a＋a 1＋a 1〉となる。もちろん平面図化してでの2分割であれば、〈(a＋a 1)＋（a 1＋a)〉となり、鏡面対称だと主張することは可能であるが、土器はあくまでも円筒状の立体物であることを考慮すれば、それはやはり詭弁というものであろう。さらにこの土器には、波底部に来る文様のうち1ケ所のみ違えている点があることも付け加えておきたい。本例は〈対称性の破れ〉の初源に位置づけられるのかも知れない。青森県千歳遺跡からも1ケ所のみ文様を違えた例が出土している。

このように〈対称性の破れ〉を秘めた土器群は、一時的ではあるが、北海道南部から関東地方まで広く分布し、まもなく姿を消す。また、北海道には道東部にかけて2単位を基本とする土器群が早期後半に広がりを示すが、この地域では以後も長期にわたり「2」への拘りが窺えるようである。波状口縁もB型波状が主である、という際立った特徴も指摘されよう。

一方、九州では早期後半の塞ノ神・平拵式として一括される土器群の中に、緩やかではあるが4単位波状口縁（A型波状の範疇であろう）の土器がある。平縁の土器とともに、第2図としてピックアップした大分県菅無田遺跡出土の2例（1—227・228）は、いずれも粘土紐の垂下で4単位に器面が分割されている。だが、ここで最も注意すべきは、分割された4単位が全て少しずつ文様を違えているという点である。しかも1—227例は1ケ所のみ渦状の文様へと大きく違えている。この辺の施文意識が、九州方面でも特異な例なのか否かは、さらに検討を要するように思う。他の九州の土器群が「無単位性」というイメージに包まれている中で、強い印象を残す土器2例である。

関東では、条痕文系土器群に4～6単位波状（A型波状が主）の類が多くあるが、2波状を一単位とするような文様構成のものも目に付く。第2図には6波状で3単位施文の例を引いた（1—149)。〈a＋a 1＋a 2〉となろう。この例を含めて、野島式界隈の施文帯を幅広く設けた土器群には、反復施文にこだわる類は少なく、対称意識の希薄ささえ感じさせられるものがある。

しかし、波状部の存在が口辺部あるいは胴部の文様に至るまでその配置を律する、という施文の仕方にまで変化があったわけではない。だが縄という原体を横位に回転施文するという、しかも口縁部から低部にいたるまで何段にも渡って施文するという意志の貫徹は、必然的に縦分割よりも横位の分帯を優先することになったとしても不思議ではない。関山式土器は4単位のA型波状口縁を有するにも関わらず、口縁部の施文帯には、波状口縁の存在を無視したかのような配置例も散見される（1—284)。これも「横位優先の歪み」と見るべきであろう。波状部の数は単位数の表徴以外の何者でもないと宣言しているかのようである。

こうした傾向は、縦方位への施文意識の芽生えた諸磯ａ式期を挟むが、底流では諸磯ｂ式土器にまで引き継がれる。途中、黒浜式期には２単位波状やＢ型波状の出現、諸磯ｂ式期には爪形文系に限った大型２単位波状（Ｂ型波状）、そして内湾するＡ型波状の採択等が継起したが、横位優先の施文意識に大きな変更はなかったようである。

これは並行する北白川系、円筒下層式系、大木式系においても大同小異であり、波状口縁や瘤貼付という手段で「数」を表徴していたのである。

とりわけ円筒下層式の施文意識は頑なである。波状部はまさに単位数の明示に特化したかのようであり、波状部が口縁部施文帯の横位展開する文様を完全に支配下に置くことはなかった。しかも施文者は、己の意志の表出を禁じているかのごとく、破格の箇所を設けることも慎んでいる。粘土紐による自在な施文が可能となった円筒上層式もこうした「忍耐」を受け継ぐ。きっちりとした４単位を基礎に、破格の施文はしないとの徹底が窺える。そうした中で、１ケ所に渦状の縄圧痕を添付した土器（１―715）などは、微笑ましい例外と言えるのかも知れない。

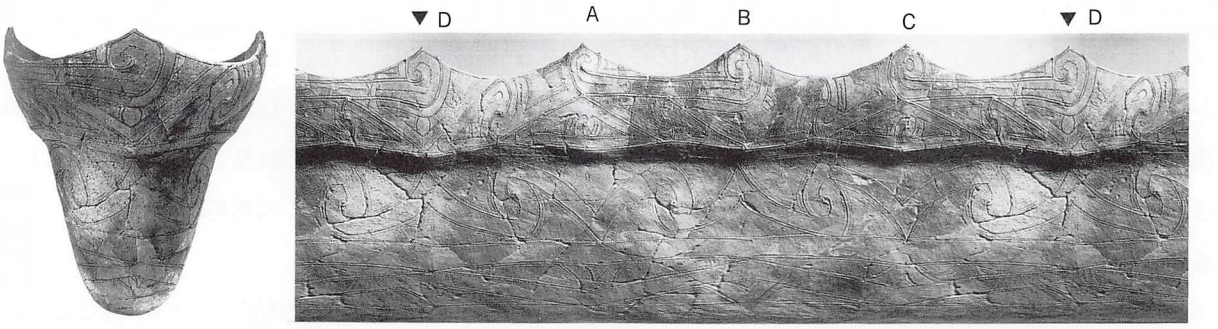
大木式系は同４式、同５式になると口縁部の施文帯幅を広げ、２乃至４単位の波状口縁を意識した縦位の単位文様の作出が見られるようになり、急激にイメージを転換する。しかし、それでも〈破れ〉をセットしない点は、円筒系の土器群と似ている。だが、大木６式になると施文構造はさらに大きく変わる。胴部が完全に施文部位として定着し、そこには波頂部を分割起点とした縦方位のモチーフが器面を巡るようになったのである。ただし、波頂部が４単位であるにも関わらず胴部は３単位のもの（１―479）、１ケ所のみ施文を省略するもの（１―483）、対面する突起を違えるとともに胴部を５単位構成とするもの（１―495）なども散見されるようになり、諸磯ｃ式、十三菩提式系（北陸の鍋屋町系を含む）の土器群との影響関係も気になるところである。〈対称性の破れ〉が確実に見えだしてきたようだ。

Ⅲ―２

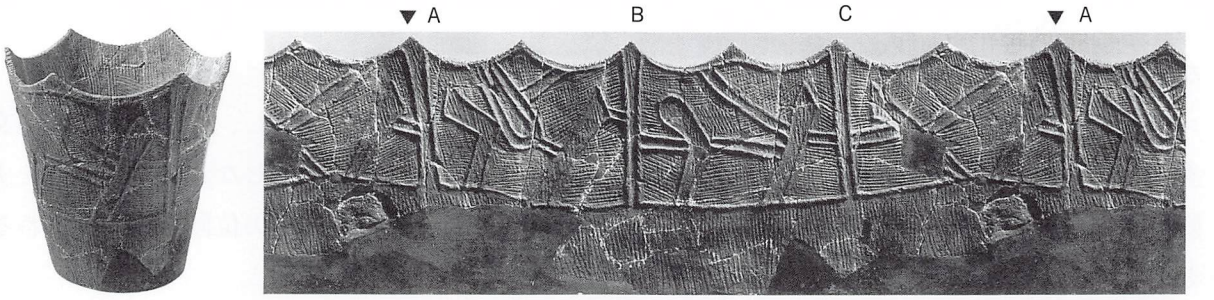
ここで諸磯ｂ、ｃ式の施文構造について少し触れる。

先ず、第２図に掲げた塚屋遺跡出土の諸磯ｂ式土器（１―569）を見てみよう。内湾する４単位のＡ型波状口縁を持ち（便宜上、左から順にＡ、Ｂ、Ｃ、Ｄと呼ぶ）、各波頂部にはすべて瘤の貼付がある（１ケ所のみ推定復元）。この瘤は、しばしば獣面と入れ替わる。主な施文帯は、内湾気味の口辺部（Ｉ施文帯）と胴部（II施文帯）にあり、横位方向への施文を原則とする浮線文様がほぼ器面全体に施される。しかしＩ施文帯は、一見すると、波状部を中心にした文様展開に見え、横位方向への施文が優先されているようには見えない。だが、展開写真を良く観察してみよう。口唇部直下から４条一単位の浮線が波状部に沿って、まさに「波状」に巡らされ、その下には同波状浮線文と対向するような波状浮線文が、さらにまたその下には上の波状浮線文と対向するように波状浮線文が器面を一周しているのである。単位文様は、そうした波状間の空白部への充塡文様にすぎない。波状浮線によって分帯される部位を、上から仮にＩａ帯、Ｉｂ帯、Ｉｃ帯とすれば、単位文様の充塡箇所は、波頂下のＩａ帯、Ｉｃ帯、波底下のＩｂ帯に生じる。そうした意味では、波状部を中心に実にきっちりとした文様配置が実行されてきた土器だと言い得る。

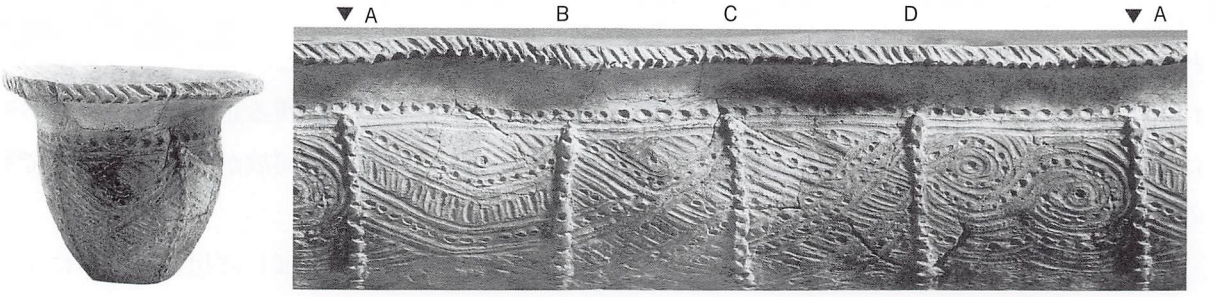
しかし、Ｉａ帯の単位文様を見ると、ＡとＣ、ＢとＤとでは充塡文様が異なっている。つまり、二種文様の交互配置になっているのである。さらにＩｂ帯ではＤ―Ａ間のみを違える。これでＩ施



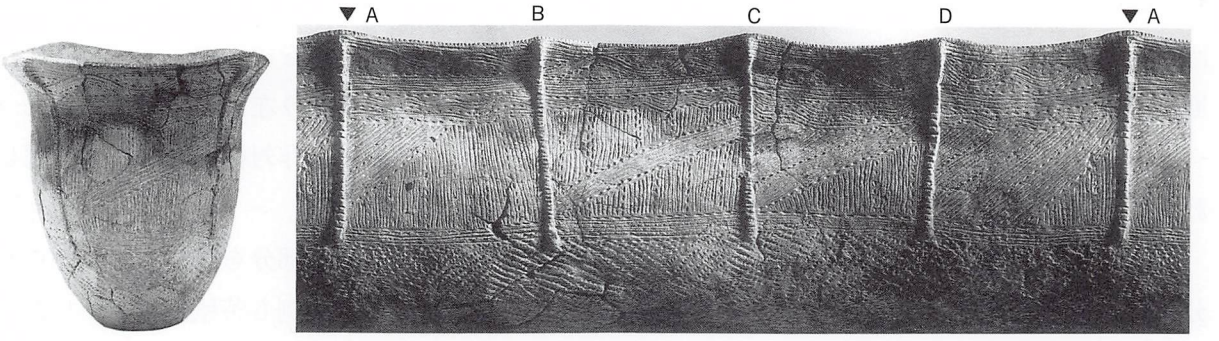
1-93　青森・田面木平



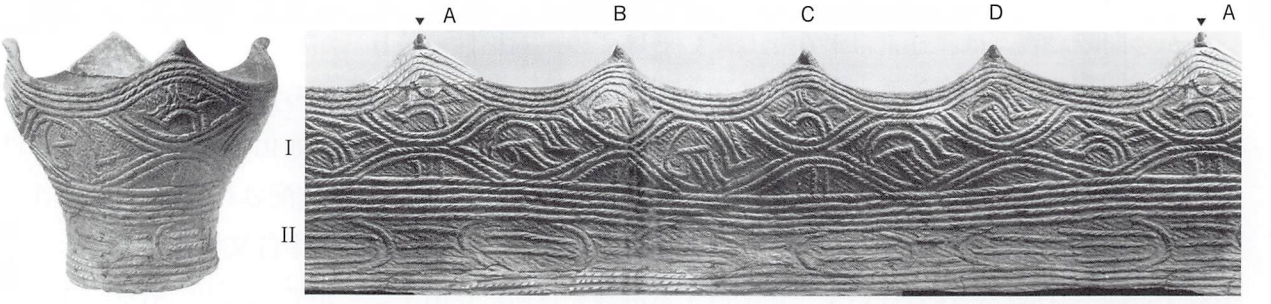
1-149　東京・堂ヶ谷戸



1-227　大分・菅無田



1-228　大分・菅無田



1-569　埼玉・塚屋

第２図　土器展開写真（1）

文帯は、180度の回転対称があり得なくなったのである。Ｉｃ帯での浮線の本数もＡ・Ｂが３本、Ｃが２本、Ｄでは省略、とされ対称性が断ち切られているのである。また、II施文帯においても、ＤからＡにかけての部位で楕円枠状文の幅を２単位分に拡張している。ただし、もともと枠状文は波頂部間に配置する原則だった（Ａ～Ｃ間）ものが、Ｃ～Ａ間では崩されており、円環の断ち切りとばかりは言えず、二項対立の要素も否定できない。いずれにしろ、明確に〈対称性の破れ〉下にある土器だと言えよう。

今、塚屋の土器が、分割がしっかりしているように見えながらも、横位方向への施文意識が優先している点についても指摘した。諸磯ｂ式土器の分割意識の弱さは、波状や渦文の横への連接が基因にあると思われるが、この辺は北白川下層式系土器群の分割意識の高さとの大きな相違点ともなっている（鈴木1980）。

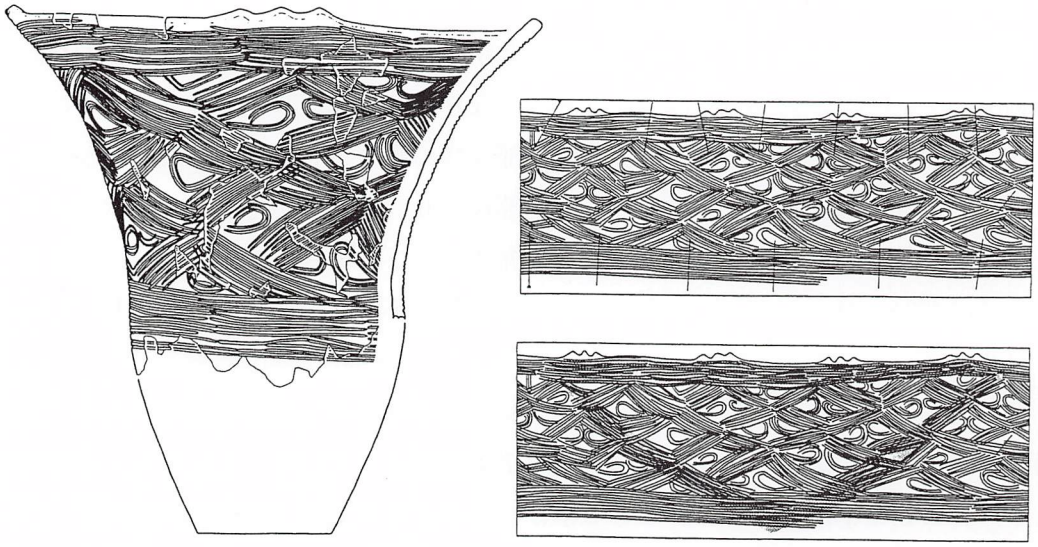
第３図１に掲げた茶屋遺跡出土の土器も、口縁部の４ケ所に突起を配置し、しかも幅広の施文帯を持ちながらも、分割意識の希薄さを物語っている。つまり、「４」を明示しながらも、施文をする際の施文具の移動は一つの突起を起点にするのみで、それ以降は何ら突起の位置や数にこだわることがないのである。

ちなみに展開模式図（上）は施文具の移動単位を示し、同（下）は、施文上の歪みを示す。集合化した平行沈線による鋸歯状施文は、塚屋の波状文の重ね方同様、頂部同士が接するように４段にわたって構成される。そのため必然的に空白部は菱形状を呈する。しかし、きれいな菱形が形成されるのは網で囲った逆三角形の範囲に限られる。何故か。逆を言えば、残る正三角形の部分の菱形は乱れており、底辺部に向かうにつれて、歪みが大きくなっているのは何故か、ということでもある。

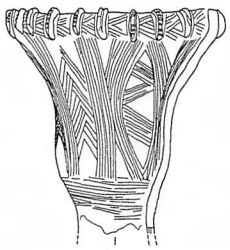
だが、理由は単純。円筒状とは異なり、朝顔状に開く器形の場合にしばしば起こる歪みにすぎない。つまり、幅広の施文帯においては、その上部から下部へと施文面積が縮小することは自明であり、同じ大きさの菱形を描き続ければ、下部ほど歪みが大きくなるということなのである。それを回避するための方策は、分割ラインを常に意識しながら下部の菱形面積を縮小させる以外にない。展開模式図に表れた「歪み」は、文様配置をきちっと決めずに、いきなり左→右へ、そして上→下へと連続的に描き続けた結果としての「歪み」なのであった。必ずしも非対称を意識的に企図したわけではないようだ。

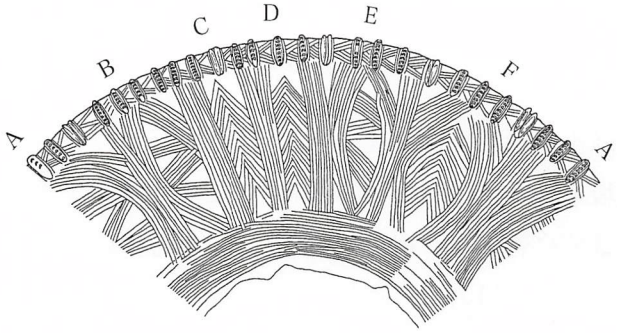
結局、諸磯ｂ式土器は、波状部や突起という分割意識にとって必要な部分をセットしながらも、分帯意識優先（横位への連続施文）から脱しきることはなかった。塚屋例も茶屋例もそうした一例にすぎない。一方で、浮島式土器も施文具の左→右への反復施文を基本としており、諸磯ｂ式と類似した施文構造を有すると言い得る。

しかし同時に我々は、通常は潜在化しているはずの〈対称性の破れ〉が塚屋例で表面化していた事実を確認したばかりである。その意味するところについて語るすべを持ち合わせてはいないが、諸磯ｂ式の末葉（ｂ３式）になるとかなりの確率で〈対称性の破れ〉が表面化してくる。とりわけ胴部施文帯の単位文様の数が、口縁部の波状や突起で明示される「４」に支配されることなく、「３～５」であるという事実、しかもその単位文様も１ケ所のみ違える例、２単位文様を一組としつつ相対する面とは同一にならないように配置する例等を容易に見出すことができるのである。こうした傾向は、さらに諸磯ｃ式土器に継承される。

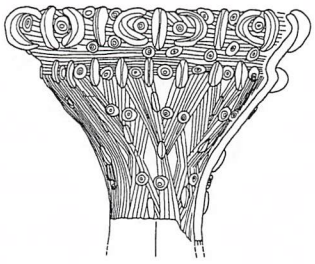


1 埼玉・茶屋

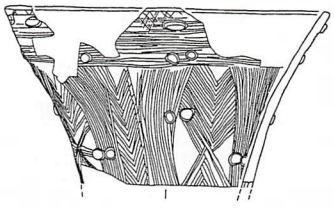


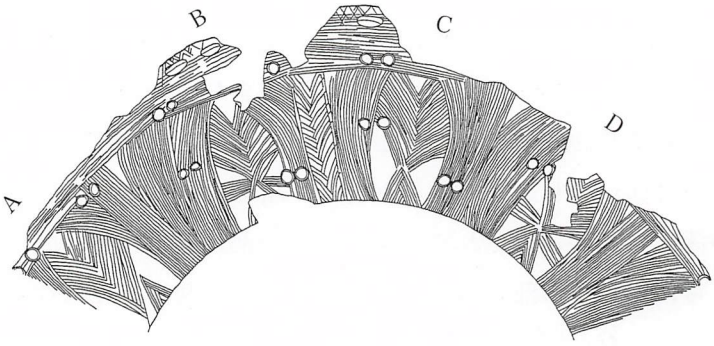


2 群馬・糸井宮前



3 群馬・糸井宮前





4 群馬・糸井宮前

第3図　土器展開図（前期）

第3図2を見ていただきたい。内湾気味の口縁部には縦瘤が連続的に貼付されるが、瘤上に刻みの付加されていない縦瘤が「5」ケ所あり、その間には刻みのある瘤が、5・6・4・3・3個というように不定数が順次挟み込まれている。分割の明示としては杜撰と言わざるを得ない。また、この時期の胴部施文帯の幅は胴部全体に及ぶほど広くなり、縦分割を基本とするモチーフ展開が一般的になったにも関わらず、本例も当然のように胴部文様の縦分割と口縁部の縦瘤とが連動することはない。具体的には、縦瘤の「5」に対して、胴部は「6」分割。記号化すれば〈a＋a＋b＋b＋a＋c〉となる。ただしcはaとbの両要素を併せ持つことから、(a＋a)と(b＋b)という二項に対しての調停役が(a＋c)である、とする理解も不可能ではない。つまり〈(a＋a)＋(b＋b)＋(a＋c)〉ということである。

一方で、第3図3のように、胴部文様の分割ラインが全く不詳の土器群も若干はある。口縁部の( )状の隆帯を1単位と仮定すると、ここには推定7単位配されていることになり、単位の明示とは到底言えない。むしろ単位の明示は、ここで挙げたような貼付文系土器群(平縁が主)ではなく、同時期存在の結節浮線文系土器群(大波状縁が主)が担っていたというべきであろうか(鈴木2006)。あるいは器種ごとの表象性、器種相互の役割分担といった面への配慮も必要なのかも知れない。

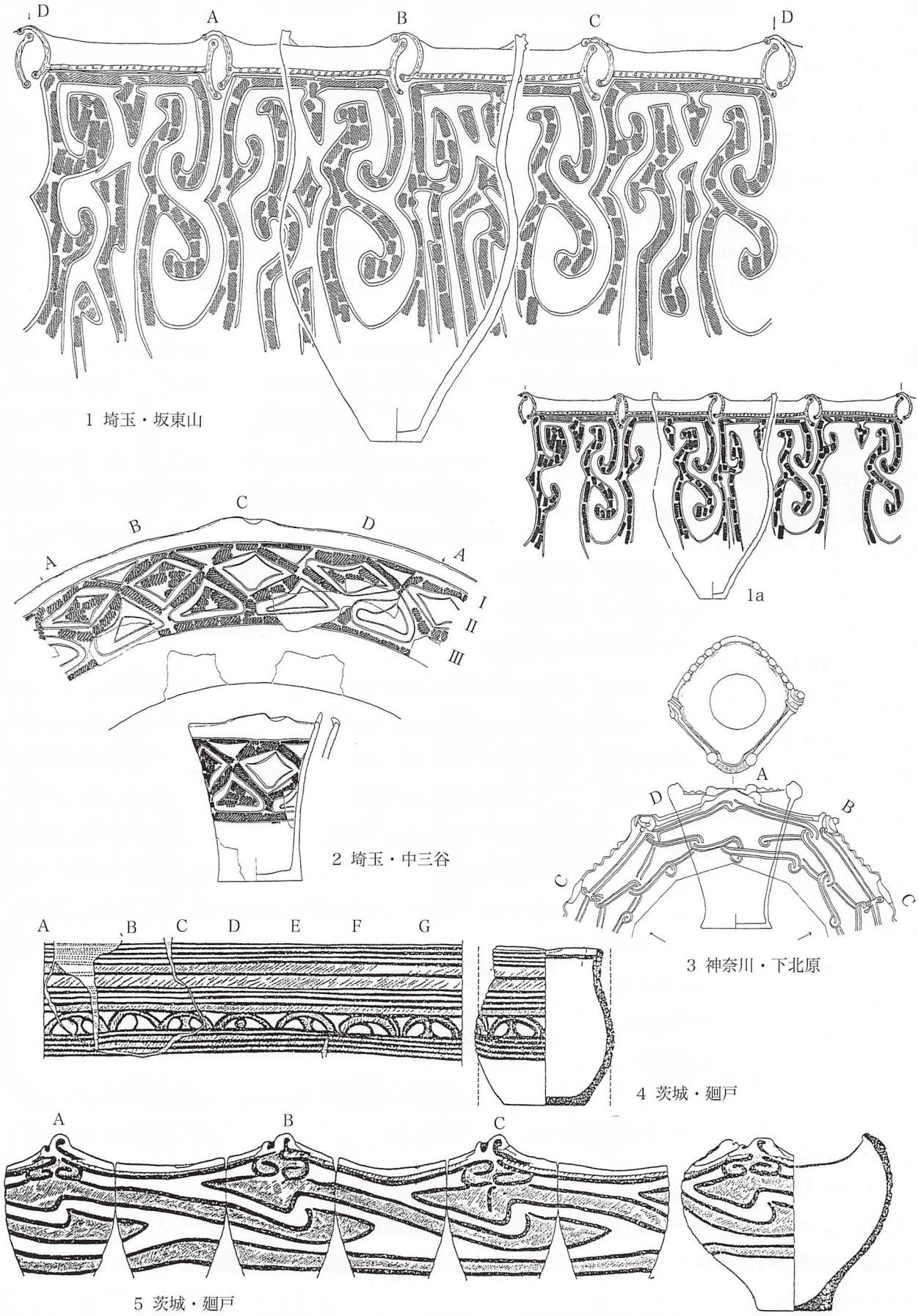
III―3

次に後期以降土器群の瞥見に入る。

第4図1は坂東山遺跡出土の称名寺式土器。口縁部には無文帯を置き、両端に円形刺突のある縦長弧状隆帯が縦位に若干入り組んで配され、その箇所のみが4ケ所小突起化している。4ケ所の入組縦長弧状隆帯は刻み目のある隆帯でそれぞれ連結される。隆帯下には縄文の充塡された曲線的な文様が描かれるが、一筆書きのごとく連なる「主文様」と空間を埋める「従文様」とに分けることができる。仮に「従文様」を消去すると、実にシンプルな文様構成が見えてくる(第4図1a)。「従文様」の変形の自在さが、この種の土器を複雑に見せていたわけである。

さて、説明の便宜上、小突起箇所を順にA～Dとすると、相対する位置に当たるA小突起下とC小突起下の胴部文様は殆ど同一であることが分かる。ところが、B小突起下とD小突起下はモチーフの右側部分の変形がそれぞれ大きく、この土器を90度あるいは180度回転したとしても重なることはない。胴部施文帯を記号化すると〈a＋a1＋a＋a2〉となる。しかし、もう一つ注目すべき点がある。それは入組縦長弧状隆帯と横位の刻み目隆帯との接点部分への円形刺突の有無である。すなわちAの両側とBの左側にはあり、CとDにはない、という相違点である。これにて対面する位置の対称性は完全に破られたのである。

第4図2は鴻巣市中三谷遺跡出土の深鉢であり、口唇部に1ケ所、凹みのある小波状を設け、正面性を明示している。胴部文様は、縄文帯に挟まれた施文帯の中央に菱形文様を4単位横位に連接する。したがってその中間には、逆と正の三角形が必然的に生じる。この土器の施文上の特徴は、円環状に同一文様が繰り返されることを1ケ所のみ破る点にある。まず正面に当たるCの位置のみ菱形内への縄文充塡が省略される。逆三角形の部分ではA―B間の位置のみやはり縄文充塡の省略がある。さらに正三角形部分では、欠損箇所が多く断定はできないが、おそらくD―A間のみ縄文が充塡されなかったと思われる。言うなれば、正面であるCの背面に当たる、Aの菱形を挟むかのように省略部が設けられたのではないか。正面性の明示ということと裏腹の関係にあると考えられる。


D
A
B
C
D
1 埼玉・坂東山
1a
C
B
D
A
A
I
II
III
2 埼玉・中三谷
A
D
B
C
C
3 神奈川・下北原
A
B
C
D
E
F
G
4 茨城・廻戸
A
B
C
5 茨城・廻戸

第4図　土器展開図（後期）

正面性の明示という点では、次の神奈川県下北原遺跡出土例（第４図３）も中三谷例と施文構造がやや類似する。正面に対し両側縁の突起を違え、さらに背面には正面の突起に対し凹みという全くの対立文様が配されるのである。

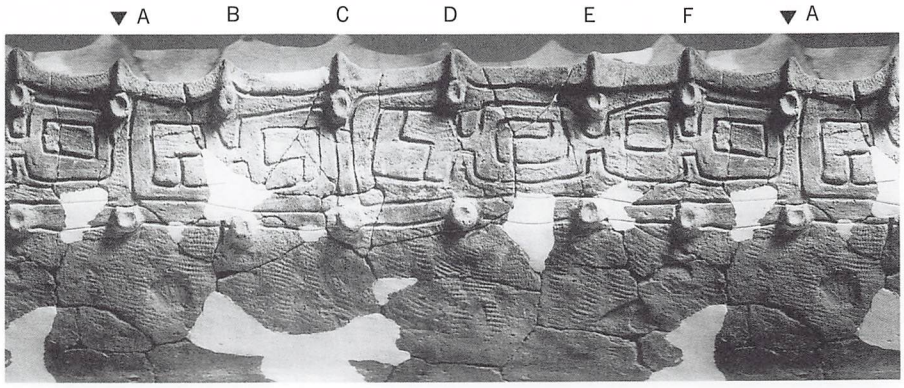
第４図４・５は茨城県廻戸貝塚出土例。４は胴腹部にのみ幅の狭い施文帯があり、半弧状文様が７単位施されている。その内のＦの箇所のみ沈線が付加され「破れ」が設けられたかのように見える。弧状内の空白部には、さらに３種の文様が充塡される。記号で示せば〈ａ＋ｂ＋ａ＋ｃ＋ａ＋ｂ＋ａ〉となるが、詳細は不詳。５は３単位波状で、同一文様が繰り返されているかのように思われるが、Ｃにのみ縦沈線が１ケ所付加されており、やはり円環の断ち切りが窺われる。

ところで第５図には、波頂部もしくは突起等を基軸に、明確な分割軸が形成されている展開写真を集めてみた。

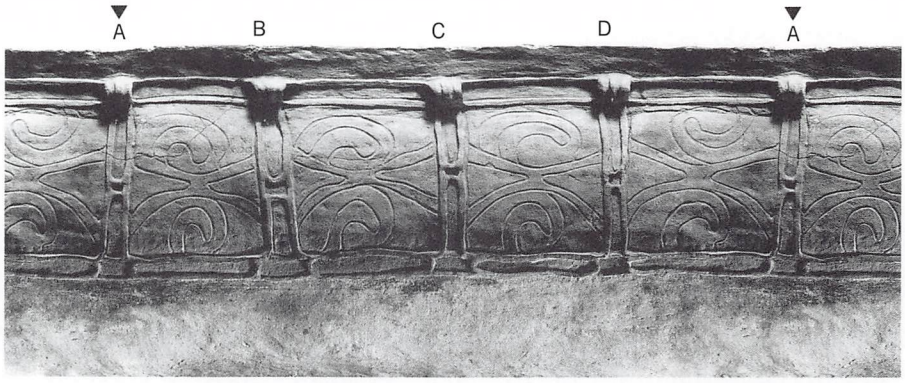
４―276は東京都小山遺跡出土の堀之内式土器であり、Ｙ字状の隆線が波頂部の突起から胴下部の横位隆線まで垂下し、四角形の施文枠が４単位形成されている。枠内には渦巻や入り組み等を基調にしたモチーフが展開しているが、４単位すべてが異なる。しかし、Ａ―Ｂ間とＢ―Ｃ間の渦文は下部隆線側からのみ立ち上がるという共通項があり、一方Ｃ―Ｄ間は上下隆線からの入組文、Ｄ―Ａ間はどちらにも与しない単独入組文という相反する文様の組み合わせとなっている。突起の形態もＡとＣ、ＢとＤが類似しており、大きくはＡとＣのラインで２分割される土器なのだろう。〈(ａ＋ａ１)＋(ａ２＋ａ３)〉。なお、Ａ突起下のみ弧状文が３段であり、他の４段構成とは違いを見せている。そうした意味ではここで円環を断ち切っていると言えよう。

他の３点の展開写真は、ほぼ同時期の土器。４―201は青森県韮窪遺跡出土例であり、口縁部小突起は６単位を明示するが、実態は３単位に施文枠が構成されている。しかし、枠内文様は３単位ともモチーフを違えるという特徴がある。しかも、Ｃ―Ｅ枠とＥ―Ａ枠の文様は連結し、Ａ―Ｃ枠のＡ側は縦沈線で完全に断ち切られる。一方、Ｃ側は無文部を設けて、やはり隣接文様と決別している。だが、見方によっては、沈線（Ａ）、無文（Ｃ）、連結（Ｅ）と、縦枠線も３ケ所すべて違えているということができよう。〈ａ＋(ａ１＋ａ２)〉。４―211は青森県中市遺跡出土土器。実に単純な文様構成の土器であり、Ｄ―Ａ間の枠内文様のみ１ケ所施文が反対になっており、円環が断ち切られている。〈ａ＋ａ＋ａ＋ａ１〉。４―345は福島県桑名邸遺跡出土の深鉢で小突起が３単位配される。小突起から垂下された隆線は胴腹部を巡る隆線と連結し、四角形の枠状施文部を形成する。しかし、この枠内はさらに沈線により縦に２分割される。ところがこの小枠は、四角形の下辺のみ２ケ所省略する箇所があり、結果として３単位文様がすべて異なるという結果となっている。つまり〈(ａ＋ａ)＋（ａ＋ａ１)＋（ａ１＋ａ)〉となるのである。しかし、小突起下の隆線がＡ・ＢはＲ字状に、Ｃのみ反転したЯ字状になっている点を評価すると、前述した小枠の組み合わせを垂下隆線が中心に来るようにずらすことも考慮する必要があるかもしれない。そうであれば〈(ａ＋a)＋(ａ＋a)＋（ａ１＋ａ１)〉となる。

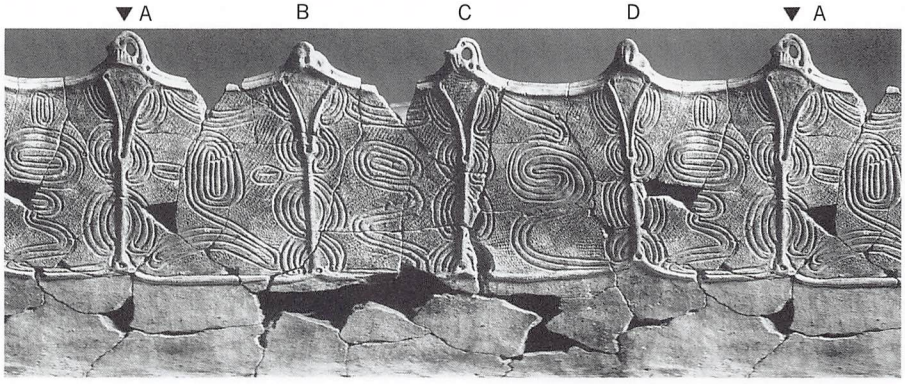
以上のように、ほんの一部ではあるが関東・東北の後期前葉土器の施文構造を見た。さらに多くの土器を分析すれば、今述べた傾向が本来的なのかどうかも検討の俎上に載せることができることと思われる。例えば、門前、南境、綱取系土器群の単位は概ね「４」をベースにしつつも「３」あるいは「６」も目立ち、しかも口縁部の小突起等が胴部文様の割り付けに当たり強い影響力を保持している点。しかも―特に綱取系に顕著なのだが―突起の１ケ所のみ大型化することで正面性を主



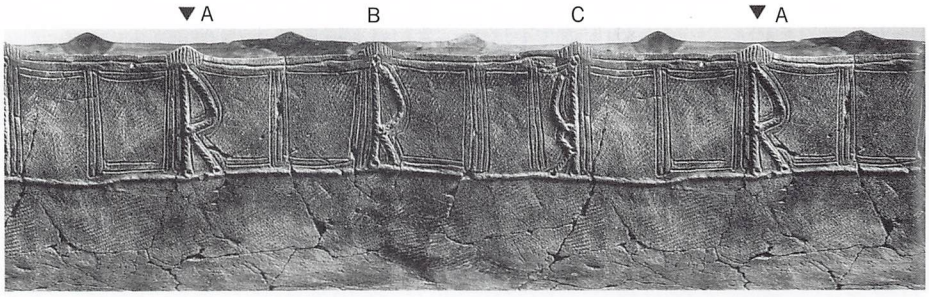
4-201　青森・韮窪



4-211　青森・中市



4-276　東京・小山



4-345　福島・桑名邸

第５図　土器展開写真（2）

張しているにも関わらず、胴部文様は比較的回転対称性を損なわない、という事実も施文構造上重視されなければなるまい。一方で、越後方面の三十稲葉系土器群が「2」あるいは「4」単位性を保持し、比較的きっちりした回転対称を有する点にも興味をひかれる。あるいは文様レベルを超えて、施文上の意識基盤が関西方面と通底する要素があったのではないかとも考えられる。ちなみに、中津系土器群は「4」、「5」、稀に「7」単位を示すが、やはりきっちりとした回転対称を原則としていたらしい(特に古式段階)。ところが縁帯文系土器群に至ると、口縁部の小突起や胴部文様を施文帯ごとに確認すると、単位文様の反復施文による回転対称性を指摘できるが、施文帯同士を縦に貫く分割意識は弱くなる傾向にあるようだ。しかし関西方面では、それも一時的であり、次第にシンプルな施文及び3単位性の採用とともに、回転対称性はますます定着していったのである。一方で、九州においては、後期の早い段階の土器群（指宿式土器）に、円環構造を断ち切る意識の明確な土器が含まれており注目しておく必要があるだろう（4—560、第6図4—561など)。

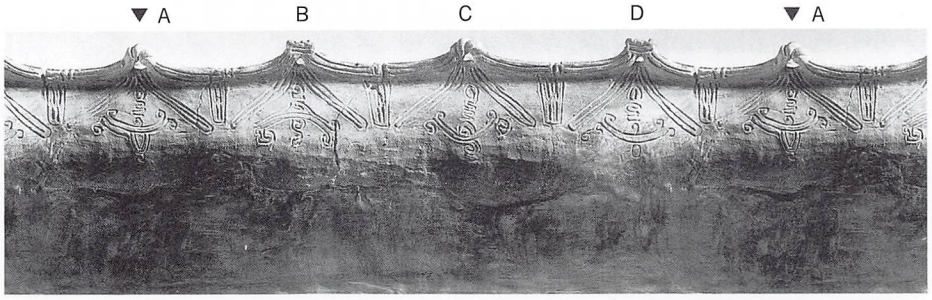
以上から、少なくとも後期前葉の北海道から九州までの太平洋側には一貫して〈対称性の破れ〉を施文上の基本原理とする土器群が見え隠れしていたと言い得るのではないだろうか。

しかしながら後期中葉以降は、ますます〈対称性の破れ〉は遠のいていく。こうした傾向は汎列島的であり、北海道から東北、関東、中部、北陸に広く分布する加曾利B式系土器群、さらには西日本をも含む後期後葉の土器群に至るまで、実に対称的（回転対称）な施文構造の土器群が卓越する。しかし、そうした中でも対称性を破ろうとする土器は必ずある。青森県ウルエ長根遺跡出土土器や秋田県藤株遺跡出土土器（4—403、第6図4—404）などが好例となろう。また、加曾利B1式で目立つ「3」単位波状、同B2式以降の「5」単位波状定着の意味するところは何だろうか。〈対称性の破れ〉の潜在化に反比例するかのごとく顕現してきた、割り切ることのできない「奇数」。少なくとも、それが当時の社会・集団が求めた「分割単位」だったのである。

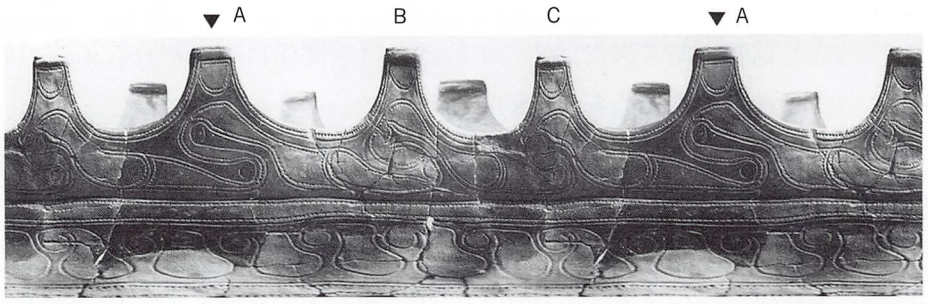
晩期になると、さらに〈対称性の破れ〉を器面装飾から窺うことは困難な状況になる。亀ケ岡式系土器は、あたかも「空間恐怖」を特徴とするかのように、土器の表面を羊歯状文、雲形文、大腿骨文等々の連続文様で埋め尽くすケースが多い。しかし、施文帯内の施文の仕方は「点対称」を基本とした単位文様の横位連続施文であり(藤沼1981)、何単位で器面を一周するのかを即座に言い当てるのは難しい。そこには分割意識はなく、「反復施文」のみが存在しているかのようである。口縁部にも小突起が連続的に見られるのみで、単位数を明示すべき波状や突起を設けることもなくなってきている。むしろ、そうした社会や集団の内蔵する「数」は、1あるいは3、4ケ所の突起を付す「壺」や「注口」へと移されたと理解すべきなのかも知れない。こうした傾向はしばらく続くが、亀ケ岡式系の終末には注口土器は失われ、新たに台付浅鉢などに波状が設けられるようになるのである。

一方、西日本方面では凹線文系以降、西日本磨研系、黒色磨研系へと器面装飾はますます少なくなる。4単位波状深鉢の印象が卓越するばかりである。そして凸帯文系の土器群へと移行していくのである。

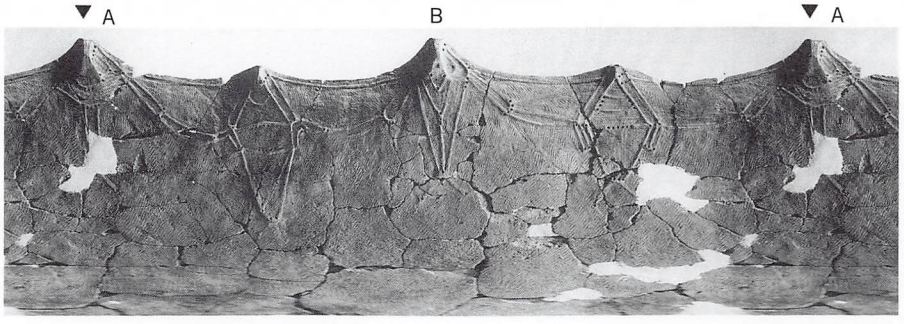
このように縄文時代終末には、〈対称性の破れ〉はほとんどの土器群からすでに消えていた。それは土器が、社会や集団の意志の描かれる場ではなくなったということを意味するのかも知れない。それはまた、縄文土器の有していた役割の一端が消失したということでもある。しかし我々は、注口や壺、あるいは台付浅鉢などといった、その時その時の花形である器種へと、その役割を転嫁す



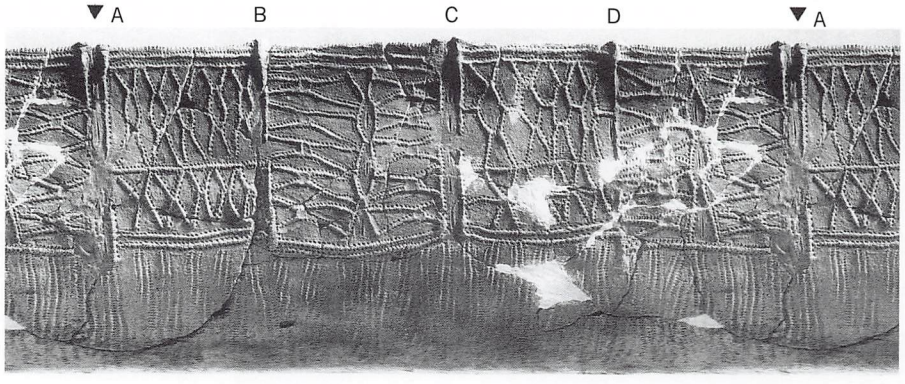
4-561　鹿児島・草野



4-404　秋田・藤株



4-1136　北海道・下田ノ沢



4-1151　北海道・町村農場

第６図　土器展開写真（3）

る例も見てきた。ささやかな抵抗ではあったろう。しかし、それが当時の社会や集団にとっての「縄文土器の存在理由」なのであった。そうした意味では、続縄文系土器への〈対称性の破れ〉の承継（第６図４―1136、同図４―1151など）は、彼らの社会・集団への興味をも掻き立てられる。おそらく幣舞式系にも見られた２単位をベースにした施文構造がポイントになろう。早期後半においてすでに北海道東部は「２」に拘りのある地域であることを先述した。注目されてしかるべきであろう。

Ⅲ―４

縄文土器瞥見の最後は、地元の安行式土器の施文構造について見ることにする。晩期安行式では東京都小豆沢貝塚出土土器が著名であるが、６単位の大突起とその間には小突起が配される。しかし、口縁部と胴部の施文帯には突起の位置とは無関係にそれぞれ５単位で単位文様が横位に連接している。安行式の施文構造を象徴的に暗示しているかのようである。

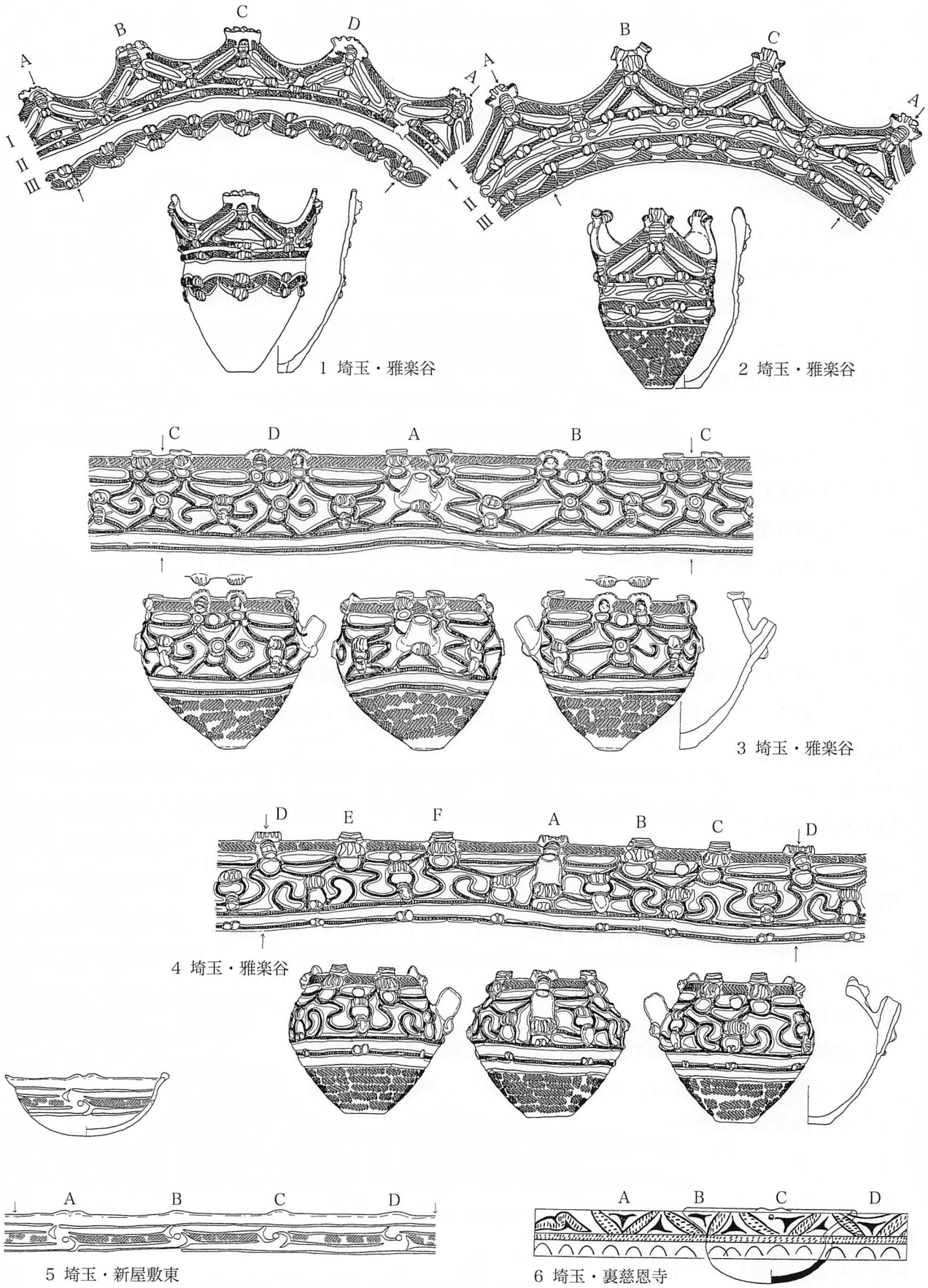
第７図には埼玉県内出土の土器を掲げた。そのうち、１・３は雅楽谷遺跡第５号土壙、２・４は同第26号土壙よりの出土例である。いずれも良く似ているが、前者はいずれも４単位、後者は３と６単位という違いも明示されている。

先ず、大波状縁深鉢である。便宜上、波頂部をＡ～Ｄ等と仮称し、施文帯を取り敢えずⅠ～Ⅲ帯に分ける。第７図１は４単位の大波状縁を有し、Ⅰ・Ⅱ施文帯は瘤の貼付を含めて密接に連携している。例えば、Ａの縦ライン上にはきっちりと瘤が並ぶ。また波底部も同様に縦ラインが意識されている。ところが、そうした原則を破ろうとする箇所が複数見られるのである。Ⅰ施文帯では、Ｄの縦瘤直下のいわゆる通称豚鼻が１個に変形されている。さらに言えば、Ｃの三角部では左の瘤には押圧がなく、Ｄの三角部の右の瘤は１個の押圧のみとなっている。Ⅰ施文帯を記号化すると〈（ａ＋ａ）＋（ａ１＋ａ２）〉となろう。Ⅱ施文帯の豚鼻の配列はさらに注目される。つまり、Ｄライン上のみが貼付を省略し、逆に、波底部のＢ―Ｃライン上にのみ加飾されているのである。こうしてこの土器は、円環を閉じることを四重にわたって破った結果、４波状部のすべてが少しずつ異なることになったのである。なお、Ⅲ施文帯はⅠ・Ⅱとは無関係に入組弧状文が８単位で器面を巡っている。

第７図２は３単位の大波状縁を有するが、１に比べれば円環の破り方が単純であり、先ずⅠ施文帯ではＢの二頭状の波頂部と直下の横瘤が他とは異なり、Ⅱ施文帯ではＣの位置のみ沈線の形を違えている。つまり、この二重の破りで３波状はすべて異なるのである。Ⅲ施文帯は、この土器もⅠ・Ⅱとは不干渉状態にあり、単位文様は７単位で器面を巡っている。波状や突起等で当該土器の単位数を明示しているにも関わらず、胴部文様の配列の無頓着ぶりは、先述した小豆沢貝塚出土例と酷似していると言えよう。

次は注口土器の例。実は、注ぎ口を持つ嚆矢としては、草創期の新潟県室谷洞窟遺跡例をあげることができるが、その後は前期の関山式土器が著名。その後、中期末から後期になると小型化しつつ一気に増加する。この種の土器は、最初から注ぎ口が正面として作られている関係上、背面、側面もやはり意識的である。ある意味、擬人化されていると言えなくもないが、他の土器群同様、対称性を極力排除しようとする意識も、やはり見え隠れしており、注目しておく必要があるだろう。

第７図３は、口縁部に２個一対の瘤が４単位配される。しかし、注口部（Ａ）とその背面の瘤（Ｃ）


A
B
C
D
I
II
III
1 埼玉・雅楽谷
2 埼玉・雅楽谷
3 埼玉・雅楽谷
E
F
4 埼玉・雅楽谷
5 埼玉・新屋敷東
6 埼玉・裏慈恩寺

第7図　土器展開図（晩期）

は横型であり、側面（ＢとＤ）は縦型の瘤という明確な違いが示されている。しかも正面Ａのみを見れば、人体を見るがごとく左右対称（鏡映対称）である。だが、菱形上空間への施文文様を子細に見てみよう。Ａ、Ｂ、Ｃ、Ｄ、それぞれがすべて異なっており、しかも相対する面も違えていることに気付かれることであろう。同様の施文構造は第７図４でも見られる。注口部（Ａ）とその背面の瘤（Ｄ）のみが同一で、側面に来る４個の瘤（Ｂ、Ｃ、Ｅ、Ｆ）との違いは明白である。しかし、この注口土器の場合は第７図３の例とは異なり、注ぎ口は左右対称に施文されておらず、むしろＢ－Ｃ間及び対面のＥ－Ｆ間の方が左右対称に文様が施されているのである。だが対面文様及び隣接文様がすべて異なるのは第７図３と同様。おそらく第７図３と異なった印象があるとすれば、注ぎ口が文様中に調和を持って配置されていないという点かも知れない。

いずれにしろ、雅楽谷遺跡出土の大波状縁深鉢及び注口土器は５号土壙よりも26号土壙例は崩れた印象を受ける。

第７図５、６は浅鉢であり、どちらも口唇部に１ケ所のみ２山突起を設けた例。第７図５は１山の小突起を他に３単位設け、施文帯へは小突起に合わせて玉抱き三叉文が配置されている。第７図６はやや変則であり、三叉文を持つ同一文様が４回繰り返された後の、やや広めの空間に入り組み文様が嵌め込まれ、５単位構成となっている。安行３ｂ式、同３ｃ式、あるいは姥山式系の大波状縁系の土器は５単位構成が多い点、さらに比較的破調を設けない点等を勘案すると、あるいは施文構造上の問題点の噴き出た箇所である、と考える余地があるのかも知れない。

Ⅳ

以上、〈対称性の破れ〉の存否について、各地、各時期の土器群を一通りチェックしてきた。しかし、覗き込む窓としては『縄文土器大観１～４』という編集者・撮影者の主観が色濃く反映された出版物に依存せざるを得なかった、という限界も認めなければなるまい。まだまだ同書を咀嚼し切れたわけではないが、展開図の作成が未だに進展していない現状では、列島全域の縄文土器を閲覧できる唯一の書物として、さらに分析するための視点を開拓していきたいものと自戒している。

そうした中で、自身の宿題としていた「Ⅲ期の範囲を確定する作業」（鈴木1983）について、概ね回答が得られたように思う。Ⅲ期とは、言うまでもなく「〈対称性の破れ〉を施文原理とした時期」のことであり、あくまで理論上として措定しておいたものである。ちなみに、Ⅰ期は〈対称的〉な施文原理を獲得する以前、Ⅱ期はそれ以後、そしてⅣ期は〈対称的な破れ〉が潜在化してしまった時期、としたのであった。

すでに個別土器の解読過程で語ってきたことではあるが、〈対称性の破れ〉とは、たった「一つの破り方」を意味するわけではなく、次の２パターンが基底にある。

① 反復施文による器面一周の拒否

② 相対する面への同一文様の拒否

しかしながら、①のみ、②のみで〈対称性の破れ〉を実現している例は少なく、大半の土器は、施文帯の数や分割明示箇所の数とも連動あるいは無視という手段で様々な対称性を破っているのが実状である。意識して読み取ろうとしない限り、見過ごされてしまう例も多い。

また、単位文様の中には「鏡像」「反転」などといった手法を駆使して描かれるものもあり、施文者にとって「対称」は極めて日常的な存在であったことも理解しておくべきであろう。

こうして読み解いていく中で、次第に明らかになってきた点として、①も②も、その他の様々な手段も、すべてが「〈対称性の破れ〉の先を見据えている」という事実を挙げることができる。結果的には、ほとんどの土器が大きく二分割され、しかも非対称となるようにコントロールされていたらしいのである。まさに「二項対立」の原理が浮かび上がってきたのであった。このことは偶数単位の土器に限定されるわけではない。たとえば奇数単位の場合でも、最終的には3単位に回帰するとともに、2単位は非対称の場合でも、必ず残りの1単位には他の2単位それぞれの文様要素を取り込んでおり、あたかも両者の調停役であったかのごとくである。非常に重要な1単位とみるべきであろう。〈対称性の破れ〉を施文原理として採択した社会・集団の意思をしっかりと受け止めるべき「1単位」であると評価しなければならない。

また、正面性の強調についても〈対称性の破れ〉に連動している可能性が高い。器種問題に複雑に絡む要素があり、本稿では指摘程度で避けてきた話題ではある。別稿が必要となろう。

さて、Ⅲ期の範囲である。

『縄文土器大観』によれば、という限定つきではあるが、貝殻沈線文系土器群がその嚆矢を担っていたのではないかと考えられる。北海道中野A遺跡例を取り敢えず「初源」に位置づけた。しかし、それも一時的であった可能性はあるが、九州の早期後半、塞ノ神・平拵式として一括される土器群中にも見いだすことができた点は注目されて良いだろう。しかし、関東・中部で言えば、確実に〈対称性の破れ〉が顕在化しはじめたのは諸磯b3式以降と考えられ、中期に至って、その施文原理は完璧に顕在化したのであった。

下限は、おそらく後期前葉、堀之内式期として良いであろう。確かにそれ以降も時折現出する。しかしそれは、潜在化してしまった〈対称性の破れ〉が何らかの切っ掛けで一時的に噴出したとみて良いのではないか。すでにⅣ期に入っていると見なすべきであろうと考える。こうした施文構造の変わり目に現れる3単位波状の土器、また5単位波状の土器の存在も注意されよう。また、安行式で確認した「破れ」も、やはり一時的とする評価が適当と思われる。

しかし、西日本方面は、北陸を時折巻き込みながらも、一貫して〈対称性の破れ〉に支配されたことはなかった。つまり、〈対称性の破れ〉とは東日本方面の縄文社会が採択した施文構造だった、と結論付けられるのである。

おわりに

縄文人の思考と現代人の思考がどのレベルで関わり合うのか混沌としている。我々には、互いに鏡像関係にある右手と左手がある。さらに言えば、外観レベルではあるが、人間は身体の中心断面を境にして、互いに鏡像関係にある部分が続いている。そして当然のように、我々は我々自身の反映として、あるいは延長として様々な道具を人間化してきた。我々の周囲を見回してみても、実に様々な左右対称なものに取り巻かれていることに気付かされる。おそらくそこに安心感や美意識なども内在しているのであろう。

しかし、一方で我々の日常生活には常に左右の違いが入り込む。右利きか、左利きか。右側通行か、左側通行か。なぜトラック競技や野球は左回りになっているのか。地球の自転の左回りと関係があるのだろうか、とか。卑近な例から、いくらでも導き出すことができる。外観とは別に、我々の内臓は非対称であり、右脳と左脳の働きも異なる。さらにミクロの世界に踏み込めば、人間を含

めた動物の対称性は崩れる。分子レベルでみれば、すべての生命世界は非対称であるという。こうした科学的事実で左右の違いを説明できるとは思わないが、環境や文化・制度も大きく関与している可能性は否定できない。

自然から文化への移行を実現した人類が、どのような社会や集団のあり方を選択してきたのだろうか。我々考古学を学ぶ者は、遺された僅かな物質文化の痕跡を元に、様々な分類体系や思考体系の存在を明らかにしなければならない。民俗学や文化人類学は、現在という同じ時間帯を共有する人々に関する記録を蓄積しつつ、その大きな成果として、「野生の思考」を明らかにした。現代社会を相対化する視点の登場は衝撃的でもあり、現代思想界への影響も小さくなかった（レヴィ＝ストロース1972ほか）。しかし、我々の縄文時代は時間の隔たりが大きく、確実なつながりを模索するには、いくつもの関門を潜り抜けなければならないという宿命があり、研究テーマもいきおい禁欲的にならざるを得なかったのである。ところが最近の認知考古学は、人類の思考能力はホモサピエンス・サピエンスの飛躍的進化以来、本質的な変化をとげていない。我々人類の「心」に係る基本的な仕組みは、数万年来変わっていないということを明らかにしつつあるらしい。時空を超えて共通する確実な分析方法が求められる時期に至ったということでもある（中沢2006）。本稿で見えてきた「対称」「非対称」あるいは「二項対立」が、今後どのように進展するのか、筆者自身にも予測がつかないが、楽しみではある。

なお、縄文土器には極めて抽象的ではあるが、蛇や蛙、みずちなどと称する類や想像上の動物、あるいは人体、さらには顔面、獣面、時には土偶などが描かれる一連の土器群の流れがある。これらは概ね中期勝坂期を中心とする。しかし一方で、後期末葉以降、男女の土偶を貼付するもの、男性と思われる顔面が描かれるもの等が現れる。「男」の存在が、社会・集団の意思として初めて土器に顕われ出したのである。これらは弥生初期の人面壺に連なる要素がある。明らかに描かれるものが違う中期と後・晩期。土器に対する思考の相違を窺わせる。これらは縄文土器の施文構造を解明するうえで欠かすことのできない土器群であることについては論を俟たない。小林達雄の言う「物語性文様」（小林1994）とどのように関わり合うのだろうか。この件についても宿題となった。稿を改めたい。

縄文土器の施文構造を明らかにしたいとの望みを抱いてからすでに30数年を経た。その間、谷井彪、嶋崎弘之、笹森健一、小林達雄、安孫子昭二氏等の諸論考から様々な刺激と指針を与えられた。感謝申し上げたい。なかなか咀嚼し切れているわけではないが、最近ではさらに、小杉康、桜井準也、石井匠の諸氏による意欲的な論考もみられるようになってきた。当時から見れば、まさに隔世の感という思いがする。

方法論や立論の立場等、様々な迫り方が予測されるが、いずれにしろ「破片では解明できない考古学＝縄文土器の施文構造」について多くの方々の論考が公表され、活発な議論が交わされることを念じて稿を閉じることとする。

なお、柿沼幹夫氏には文献面でお世話になった。多謝。

《引用・参考文献》

安孫子昭二他　1969　『多摩ニュータウン遺跡調査報告Ⅶ』多摩ニュータウン遺跡調査会
安孫子昭二他　1975　『貫井南』小金井市貫井南遺跡調査会

新屋雅明他　1992　『新屋敷東・本郷前東』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第111集
石井　　匠　2009　『縄文土器の文様構造―縄文人の神話的思考の解明に向けて―』未完成考古学叢書７
稲田　孝司　1972　「縄文式土器文様発達史・素描（上）」考古学研究18―４
黒坂禎二他　1985　『北塚屋（II）』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第48集
黒田　玲子　1992　『生命世界の非対称―自然はなぜアンバランスが好きか―』中公新書1097
クロード・レヴィ＝ストロース　1972　『構造人類学』みすず書房
クロード・レヴィ＝ストロース　1976　『野生の思考』みすず書房
クロード・レヴィ＝ストロース　1990　『やきもち焼きの土器つくり』みすず書房
小杉　　康　2006　「土器造形の発達とカテゴリー操作」『心と形の考古学―認知考古学の冒険―』同成社
小杉　　康　2007　「物語性文様―縄文中期の人獣土器論―」『縄文時代の考古学11』同成社
小林達雄・小川忠博編　1988～1989　『縄文土器大観１～４』小学館
小林　達雄　1994　『縄文土器の研究』小学館
斉藤　弘道　1996　「東関東の様相」『第９回縄文セミナー　後期中葉の諸様相』縄文セミナーの会
桜井　準也　2006　「土器の文様区画と認知構造―文様の割付と「うつわ」の認知の問題をめぐって―」『心と形の考古学―認知考古学の冒険―』同成社
桜井　準也　2008　「文様の割り付け」『縄文時代の考古学７』同成社
笹森健一他　1985　『貝塚山遺跡発掘調査報告書―第２地点―』富士見市遺跡調査会調査報告第24集
嶋崎弘之他　1979　『ハケ遺跡Ｃ地区』上福岡市ハケ遺跡調査会
嶋崎　弘之　2004　「縄文人の方位観」帝京大学山梨文化財研究所研究報告第12集
嶋崎　弘之　2010　「縄文人の思考」埼玉考古第45号
庄野靖寿・立木新一郎　1967　「岩槻市裏慈恩寺遺跡発掘調査報告」埼玉考古第５号
鈴木　公雄　1970　「後・晩期縄文式土器における Design System について」人類学雑誌78―１
鈴木　公雄　1982　「縄文波状縁土器の文様配置について」史学雑誌52―２
鈴木　敏昭　1979　「縄文土器研究の新視覚」埼玉考古第18号
鈴木　敏昭　1980　「諸磯ｂ式土器の構造とその変遷」土曜考古第２号
鈴木　敏昭　1983　「縄文土器の施文構造に関する一考察―加曾利Ｅ式土器を媒介として―」信濃35―４
鈴木敏昭他　1983　『台耕地（Ｉ）』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第27集
鈴木敏昭他　1984　『茶屋遺跡』白岡町埋蔵文化財調査報告書第２集
鈴木　敏昭　1987　「加曾利ＥII式土器における施文構造の変容について―埼玉県北西部を中心に―」『埼玉の考古学』新人物往来社
鈴木　敏昭　1989　「諸磯ｂ式からｃ式への土器変遷」埼玉県立博物館紀要15
鈴木　敏昭　2006　「諸磯ｃ式土器に関する一断想」『埼玉の考古学II』六一書房
鈴木保彦他　1977　『下北原遺跡』神奈川県埋蔵文化財調査報告14
関根慎二他　1987　『糸井宮前遺跡II』群馬県埋蔵文化財調査事業団
高林　均他　1974　『平山橋遺跡』東京西線及び北八王子編電所遺跡調査会
谷井　彪他　1974　『坂東山』埼玉県遺跡発掘調査報告書第２集
谷井　　彪　1977　「勝坂式土器の文様構造について」埼玉考古第16号
谷井　　彪　1979　「縄文土器の単位とその意味」古代文化31―２・３
友枝　啓泰　1974　「ペルー・モンターニャのピーロ族の土器」民族学研究39―２
友枝　啓泰　1975　「ペルー・モンターニャのピーロ族の文様」民族学研究40―１
中沢　新一　2004　『対称性人類学』講談社選書メチエ291
中沢　新一　2006　『芸術人類学』みすず書房
中島　宏他　1977　『金堀沢遺跡』入間市金堀沢遺跡調査会
橋本　勉他　1990　『雅楽谷遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第93集
藤沼　邦彦　1981　「東北地方」『縄文土器大成４』講談社
細田　勝他　1989　『中三谷遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第76集
宮崎朝雄他　1972　『加倉・西原・馬込・平林寺』埼玉県遺跡調査会報告第14集
横山悦枝他　1974　『北八王子西の遺跡』東京西線及び北八王子変電所遺跡調査会
ロジェ・カイヨワ　1976　『反対称―右と左の弁証法―』思索社
渡辺　公三　2009　『戦うレヴィ＝ストロース』平凡社新書498
山内　清男　1936　「日本考古学の秩序」ミネルヴァ１―４
山内　清男　1937　「縄紋土器型式の細別と大別」先史考古学１―１